

2023年10月29日

## 「口朝接近は中朝関係に影響するのか」

(韓国・北朝鮮研究会コメンタリーNo. 3)

霞山会主任研究員

堀田幸裕

## 1. ポストコロナに向けた流れの中で

中朝関係は 2020 年初の国境封鎖以来、一部の貿易を除いて交流はほぼ断絶状態にあったが、北京と平壤を結ぶ空路が 2023 年 8 月 22 日によりやく再開された。中国に滞在のまま、3 年以上帰国できずにいた北朝鮮人が搭乗している模様で、池在竜・前駐中国北朝鮮大使も再開初便で本国へ帰還している。

表 コロナによる北朝鮮国境封鎖からの経緯

時期	状況
2020 年 1 月 22 日	コロナ感染拡大を受けて中国からの観光客受け入れ停止
1 月 30 日	中朝間の国際列車・航空便停止、中ロ航空便停止
2 月 4 日	中ロとの国際列車運行停止
2022 年 1 月 16 日	中朝国際貨物列車運行再開
4 月 29 日	中朝国際貨物列車運行停止（発表）
10 月 26 日	中朝国際貨物列車運行が再び開始
2023 年 7 月 27 日	平壤で開催された祖国解放戦争勝利＜＝朝鮮戦争休戦＞70 周年記念行事に中国政府代表团とロシア軍事代表团が参加
8 月 16 日	北朝鮮がテコンドー世界選手権に選手団を派遣。北朝鮮選手一行は丹東経由で中国に入国。列車で北京へ移動して空路カザフスタンへ
8 月 22 日	高麗航空の「平壤－北京」定期便が再開。2021 年に任期が切れていた池在竜・前駐中国北朝鮮大使が帰国

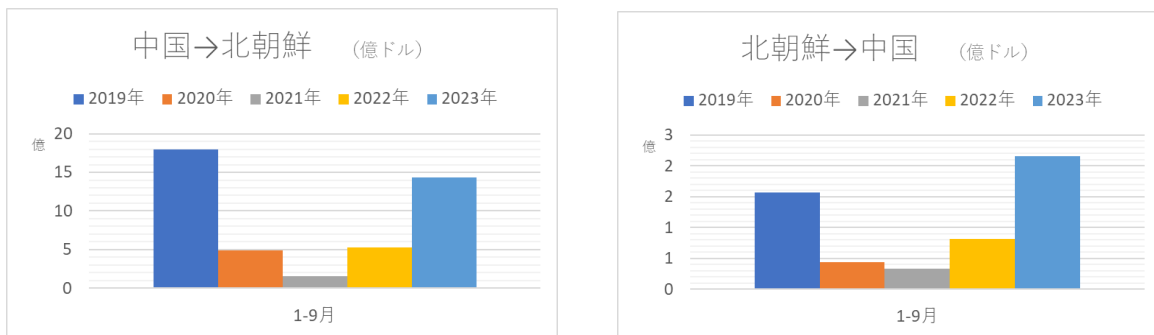
出典：宮本悟<sup>(1)</sup>、各種報道より

そして中国国営テレビ CCTV のスマートフォン向けニュースは、2023 年 9 月 25 日より北朝鮮が 2 日間の隔離措置を設けた上で外国人の受け入れを開始すると報道した<sup>(2)</sup>。しかし、中国外交部は北朝鮮からの通知はないとこれを否定しており<sup>(3)</sup>、対外開放に関する正式な発表は 2023 年 10 月末現在も行われていない。

中朝間の人的往来は正常化していないが、貿易については 2022 年以降、徐々に回復している。過去 5 年間の 1－9 月期で見ると、2023 年の中国から北朝鮮への輸出は 2019 年の水準にはまだ戻

っていないが、中国の北朝鮮からの輸入についてはむしろ 2019 年を上回る規模になっている。中国からの輸出が復活しつつあるのは国際貨物列車の運行が再開されたことが大きいですが、2019 年の習近平国家主席の訪朝以降に、中朝関係が緊密化されてきたことも影響しているのだろう。中国の国家元首としては、2005 年の胡錦濤氏以来約 14 年ぶりとなった 2019 年 6 月の習氏の訪朝では、北朝鮮の「合理的な安全と発展に関する懸念を解決するため、力の及ぶ限りの手助け」を中国が提供するという考えが首脳会談で示されており、本来はコロナでの停滞がなければ両国関係はさらに強化されるはずであった。またこの時に習氏は、「両党の国家統治・政策運営の経験に関する交流・相互参照を深化させ、双方の経済・民生分野における幹部育成・訓練と人員往来を強化したい」との立場も表明しており、共産党による統治を維持しつつ市場経済を取り入れてきた中国式の改革開放へと、北朝鮮を導きたい意向もにじませていた<sup>(4)</sup>。こうした実務者養成目的の往来についても、ポストコロナの流れの中でどのように行われていくのか注目される。

図 1 中朝貿易 過去 5 年間の 1-9 月期貿易額



出典：中国税関統計

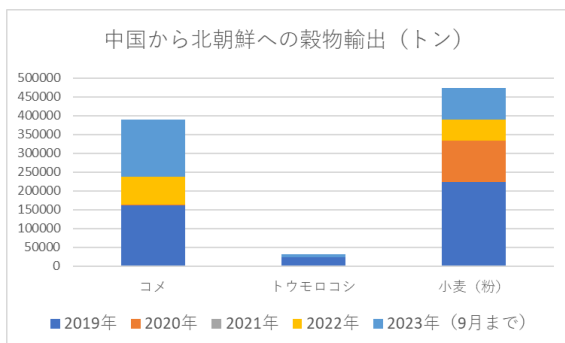
## 2. ほぼ修復した中朝関係

コロナ禍で両国間の交流は停滞していたものの、中朝関係は 2019 年以降、順調な発展を見せてきた。中国は 2021 年 6 月、北朝鮮との同盟関係の礎となっている中朝友好協力相互援助条約（1961 年締結）を更新している。北朝鮮が外国からの攻撃を受けた際に、中国が軍事的支援を行うことを明記したこの条約については、北朝鮮の核・ミサイル開発が進展して朝鮮半島情勢の緊張が高まる中で、胡錦濤政権時に廃棄も検討されたと伝えられる。だが今回三度目となる更新によって、中国はこの先 20 年間、北朝鮮有事への軍事介入を引き続き担保した形である。また 2022 年 5 月には、国連安保理での北朝鮮ミサイル開発に対する制裁決議に対して、中国はロシアとともに拒否権行使した。これは 2006 年以降、初めてのことであった。合わせて中国からのコメの輸出量は 2022 年秋以降に大きく伸びている。

では、こうした中国の関与が深まる状況に対して、北朝鮮はどう考えているのだろうか。2021 年 1 月に開催した朝鮮労働党第 8 回党大会の事業総括報告で金正恩総書記は、中国との親善関係を新世紀の要求に即して発展させ、「社会主義を核とする朝中親善関係の新たな章を開いた」と強調した。そして、5 回の中朝首脳会談を通じて「戦略的意思疎通と相互理解を深めて両党間の同志的信頼を深めた」と述べている<sup>(5)</sup>。中国に対する厚い信頼が伝わってくる表現だが、実は 5 回の首脳会談というのは金正恩氏の執権 11 年間で、2018 年と 19 年の 2 年間にのみ集中している。2012

年、金正恩氏は朝鮮労働党第一書記に、習近平氏も中国共産党総書記にそれぞれ就任しているが、それから6年近くも両者は直接顔を合わせなかった。それはとりもなおさず、北朝鮮の核開発が進展する中、「朝鮮半島の非核化」に同意して国連安保理での制裁決議にも賛成してきた中国の立場と、核戦力の完成を追求する北朝鮮の立場とが折り合わなかったからである。北朝鮮は2017年には党機関紙を通じて、非核化に賛同する中国の姿勢を、「朝中親善がいかに大切だと言っても、命と同じような核と交換してまで物乞いする我々ではないということをはっきりと知るべきだ」と強く批判したこともあった<sup>(6)</sup>。こうしたぎくしゃくした関係に転機が訪れたのは2018年である。背景には、唐突に実現した米朝首脳会談に対する中国の焦りや、トランプ米政権からの貿易制裁攻勢で米中の摩擦が拡大していたことがあった。2019年に入り米朝ハノイ会談が挫折すると、先述したように習近平国家主席が北朝鮮国賓訪問を行い、中国は北朝鮮への関与姿勢を加速化させた。北朝鮮も米国の政権交代を受けて二国間協議再開の芽がなくなったこともあり、対中傾斜を深めていった。中朝関係の変遷は、両国の対米関係が強く影響したと考えられる。

図2 中国からの穀物輸出量



出典：中国税関統計

### 3. ロシアの北朝鮮関与は中朝関係に影響するのか

さて、中朝関係の緊密化と並行して、昨年より北朝鮮とロシアが急速に接近している。2023年9月13日に行われた口朝首脳会談では、軍事技術分野で北朝鮮と協力する可能性についてプーチン大統領から言及があった<sup>(7)</sup>。

2017年まで北朝鮮への国連安保理制裁に賛同してきたロシアが、軍事協力の可能性にまで踏み込んだ大きな方針転換の最大の要因は、2022年2月より続くウクライナ戦争にあることは疑いない。砲弾等の北朝鮮からロシアへの武器支援については、すでに2022年9月に米国政府が指摘しているものの<sup>(8)</sup>、この時に北朝鮮は普段登場することのない国防省装備総局が副総局長の名義でこれを強く否定<sup>(9)</sup>。さらに『東京新聞』(2023年12月22日)が取引の実態をスクープすると、北朝鮮は外務省代弁人名義で「ありもしない朝口間の武器取引」だとして、これを「日本メディアの謀略報道」「荒唐無稽な世論操作」と批判した<sup>(10)</sup>。だが米国政府は、2023年9月に衛星画像資料などを証拠として提示し、実際に北朝鮮からロシアへ軍事物資が運ばれていると追求する構えだ<sup>(11)</sup>。ロシアにとって北朝鮮の存在価値が増したのは、まさに戦争の側面支援者としての北朝鮮のはたらきが求められているからにほかならない。

一方で、厳しい国際制裁を科され、またコロナ禍で全世界的に経済活動が収縮する中で、北朝鮮の対外貿易における対中シェアは 96.65%まで高まっている<sup>(12)</sup>。北朝鮮がロシアとの関係強化に踏み切ったのは、このまま中国にのみ過度に依存してしまうと、自国の「自主性」を損なうとの判断があったのかもしれない。

口朝首脳会談に先立ち、ロシアは 2023 年 7 月に北朝鮮で開催された朝鮮戦争休戦 70 周年の記念式典へ、ショイグ国防相を団長とする軍事代表団を参加させている。朝鮮戦争に「志願軍」を参戦させた中国が記念式典に派遣したのは、軍事色が無い李鴻忠氏（全国人民代表大会常務委員会副委員長）を団長とする代表団であった。これに対しては北朝鮮側の扱いも、明らかにロシア側を優遇しているかのような対応が目立った。金正恩総書記と李鴻忠氏の会談が行われたのも、ショイグ国防相が帰国してからであり、ロシア代表団より後回しにされた。

中国はロシアとともに、2018 年以降は北朝鮮制裁の緩和を主張する姿勢をとっている。けれども中国は経済や民生分野での北朝鮮支援について言及するものの、軍事的な支援については一切表明せず、慎重な態度を貫く。2023 年 9 月の口朝首脳会談に対する見解を問われた中国外交部の記者会見では、報道官はロシアと北朝鮮の二国間関係に関わるものだとしてその評価には言及せず、中朝関係は良好だとのみコメントした<sup>(13)</sup>。対米牽制という点では中朝の足並みは一致しているものの、米国とどう対峙していくのかという点については、三か国が同じ目標を抱いているとは言い難い。とりわけ口朝の軍事関係の深化がこのまま進むと、どこまでこの三か国連携を進めていっていいのか、中国側としては悩ましいところであり、いたずらに米中関係を緊張させてしまうという懸念もあるのではないかと。順調に回復してきた中朝関係についても、新たにロシアを含んだ三か国の関係性を踏まえて、今後の推移を見守る必要があるだろう。

<sup>1</sup> 宮本悟「北朝鮮の新型コロナウイルス対策 貿易と対外関係に対する影響」『現代韓国朝鮮研究』第 22 号、2023 年。

<sup>2</sup> 「朝鮮宣布従 9 月 25 日起外国人可依照規入境朝鮮」央視新聞客戶端、2023 年 9 月 25 日。<[https://content-static.cctvnews.cctv.com/snow-book/index.html?item\\_id=9590113634143262804&fbclid=IwAR1QkDpdriUG20N5Y2Kv1prdTr-9lu7phZxPeKiffqoLsva66cYfhMbm5VU](https://content-static.cctvnews.cctv.com/snow-book/index.html?item_id=9590113634143262804&fbclid=IwAR1QkDpdriUG20N5Y2Kv1prdTr-9lu7phZxPeKiffqoLsva66cYfhMbm5VU)>。2023 年 10 月 29 日アクセス。

<sup>3</sup> 「外交部發言人汪文斌主持例行記者會」中国外交部、2023 年 9 月 26 日。<[https://www.mfa.gov.cn/web/fyrbt\\_673021/202309/t20230926\\_11150594.shtml](https://www.mfa.gov.cn/web/fyrbt_673021/202309/t20230926_11150594.shtml)>。2023 年 10 月 29 日アクセス。

<sup>4</sup> 「習近平同朝鮮労働党委員長、国務委員会委員長金正恩举行会談」新華網、2019 年 6 月 20 日。<[http://www.xinhuanet.com/politics/2019-06/20/c\\_1124650674.htm](http://www.xinhuanet.com/politics/2019-06/20/c_1124650674.htm)>。2023 年 10 月 29 日アクセス。

<sup>5</sup> 朝鮮中央通信、2021 年 1 月 10 日。

<sup>6</sup> 『労働新聞』2017 年 5 月 4 日。

<sup>7</sup> 「【まとめ】露朝首脳会談 プーチン大統領、金委員長は何を語ったか」SPUTNIC 日本、2023 年 9 月 13 日。<<https://sputniknews.jp/20230913/17083404.html>>。2023 年 10 月 29 日アクセス。

<sup>8</sup> 「北朝鮮・ロシア、接触との見方 米高官『弾薬調達か』」朝日新聞デジタル、2022 年 9 月 7 日。

<sup>9</sup> 朝鮮中央通信、2022 年 9 月 22 日。

<sup>10</sup> 朝鮮中央通信、2021 年 12 月 23 日。

<sup>11</sup> 「米政府『北朝鮮がロシアに弾薬を提供』ウクライナ侵攻で使うと分析」朝日新聞デジタル、2023 年 10 月 14 日。

<sup>12</sup> 『2022 北韓対外貿易動向』KOTRA、2023 年、12 頁。ただしロシア税関は 2021 年の途中から北朝鮮向け貿易額を発表しなくなったので、ロシアとの交易の実態は不明瞭。

<sup>13</sup> 「外交部發言人毛寧主持例行記者會」中国外交部、2023 年 9 月 13 日。<[http://new.fmprc.gov.cn/web/fyrbt\\_673021/jzhsl\\_673025/202309/t20230913\\_11142325.shtml](http://new.fmprc.gov.cn/web/fyrbt_673021/jzhsl_673025/202309/t20230913_11142325.shtml)>。2023 年 10 月 29 日アクセス。